

C-3 フランスの服装造形に見る美意識について——ルネサンスを中心として——
大分大教育 釘宮久美

目的 フランスコスチュームでは、傳統と独創、統一と多様、道徳的要求と官能的要求、これらの両極的性格が、微妙に関係し合っているが、その個性をつくりだしている。その美意識は何に根ざしているのか興味ある問題であり、尋ねてみたいと思つた。

方法 派仏による現地での遺跡の観察、並に、現地で蒐集した文献資料を参考にして、造形の他の分野との関係を加味しながら、服装造形に見る二元性を考察した。

結果 フランスルネサンスは、当時の巨大なイタリア、燦爛たるスペインに接し、その影響を受けながら、ようやく16世紀、フランソワ一世の代に始まり、アンリ四世の代で、ひとまず、時代を畫すると見ることはでき、次に来る、17、18世紀、結実の時代への土台が築かれるのである。時代の指導的理念であつた、ユアニスムの影響は、政治の自律、経済の自律、美の自律をうながし、多様性に富んだ自由な世界が展開され、そのために、人爲の美の完成が、意圖された。しかし、このことは、同時に、人間性疎外への方角に無縁でなくなるという結果をまねき、ルネサンス人は、その独自性、感受性の鋭さを、ことさらに誇張した形を展開することによって、時代に対処して行かなければならなかつた。即ち、16世紀には既に、造形の世界に、アニエリスムの潜伏を見ることができなう。造形の二元性は、この時、生まれた。フランスのそれも、この枠を越えていらない。しかし、シャンボールの城館に見られる如く、コスチュームもまた、ゴシック的感覚に、イタリールネサンス的感覚を調和させながら、混和で、典雅な傾向を見せているのが、その特徴であつた。